

# 第 39 回長野県看護研究学会 論文集



公益社団法人 長野県看護協会



# 論文集発刊に寄せて

長野県看護研究学会

学会長 松本 あつ子

平成30年度、第39回長野県看護研究学会は、メインテーマを「つなぐ看護 ～その人らしさを支えるために～」といたしました。看護現場で看護職が患者や利用者に相対するのはその方々の人生のほんの一瞬にすぎません。それぞれの方の人生の一瞬を点と捉えると、その人らしい人生を送ってもらうために看護専門職として地域や病院、施設で過ごす点と点を結び線に、そして面にしていく役割を私たちはつなぐことで果たしていきたいと考えます。今回、どのような健康状態であっても、その人らしく暮らしていける社会を目指したとき、看護専門職として何ができるのかを考える機会になったことを嬉しく思っております。発表演題数は口演、示説合わせて42題、参加者も延べ560名と盛会で、交流集会は、認知症看護における訪問看護師との連携について、実践力のある在宅療養支援リーダー育成事業について活発な意見交換が行われました。メインテーマにふさわしく、領域ごとに看護の手と目を駆使し地域とつなぐために、それぞれの皆さんが活躍している姿を参加する皆さんと共有することができたと思います。学会に参加してくださった方をはじめ会員の皆様には多大なるご協力をいただきありがとうございました。

今年度の「長野県看護研究学会」は長野県看護協会会館で執り行われました。その目的は、安価にして多くの皆さんに集まっていただくこと、そして現場で起こっている問題や課題を研究的視点はもとより、業務改善やケースレポートなどにまとめることで多くの皆さんと情報の共有を図るための場として利用してもらいたいと考えたからです。参加人数は例年に比べ減少はしましたが、熱気に満ちた学会となったと考えます。

学会終了後、論文集への投稿論文を募集したところ、14題の応募があり、10題の掲載が決定いたしました。投稿いただいた皆様本当にありがとうございました。そして、学会委員の皆様をはじめ論文を査読していただいた皆様には、きめ細かな指導をいただき心より感謝申し上げます。

この論文は投稿されたご自身の業績となることはもちろんですが、論文を読んだ全国の方々が、そして投稿したご自身がそれを基として新たな研究に取り組む材料となるものです。今後の看護実践に活かし、なおかつ看護の質向上のための糧としますます活躍されることを期待しています。

平成31年3月

# 第39回長野県看護研究学会論文

## 目 次

- 1 在宅療養中のがん患者の思い  
—がん患者へのインタビューを通して—  
信州大学医学部保健学科 北條 由美乃 …… 3
- 2 在宅療養患者の家族が抱く思いについての質的検討  
～難病・がん患者家族のインタビューを通して～  
信州大学医学部保健学科 鮫島 敦子 …… 7
- 3 在宅療養を支援する訪問看護認定看護師が認識する在宅療養支援上の課題や困難  
信州大学医学部保健学科 徳武 千足 …… 11
- 4 息子介護者が母の排泄ケアを継続できた要因  
～介護を終えた息子介護者の思い～  
川西赤十字病院 山口 直子 …… 15
- 5 在宅で看取りを行った家族の思いと訪問看護師の関わりが家族に与える影響  
南長野医療センター篠ノ井総合病院 玉井 静江 …… 19
- 6 便性状・量の表現を標準化する方策の検討  
—ブリストルスケール・排便量スケール導入の効果—  
飯山赤十字病院 佐藤 つや子 …… 23
- 7 眼科硝子体手術後にうつむき体位と安静を強いられる患者の心理  
南長野医療センター篠ノ井総合病院 西岡 春華 …… 27
- 8 一般病棟における看護師の体位変換技術力に関する評価と課題  
飯山赤十字病院 草間 恵 …… 31
- 9 認知症患者の身体抑制に対する看護師の思い  
長野県立信州医療センター 小林 志保 …… 35
- 10 男性訪問看護師が職場環境に希望すること  
信州大学医学部保健学科 上原 文恵 …… 40

## 在宅療養中のがん患者の思い

### — がん患者へのインタビューを通して —

キーワード：がん患者 在宅療養 思い 在宅療養支援

北條由美乃<sup>1)</sup> 深澤佳代子<sup>1)</sup> 根井きぬ子<sup>2)</sup> 伊藤紗弥香<sup>2)</sup> 小林千世<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>信州大学 <sup>2)</sup>信州大学医学部附属病院

#### I. はじめに

がんに罹患する人は、1985年以降増加し続けている一方で、多くのがん腫の5年相対生存率は上昇傾向にあり<sup>1)</sup>、がん患者は診断を受けてから長期にわたりがんと付き合うことになる。近年、がん治療の進歩に伴い、治療の場は入院から外来や在宅医療へとシフトしており、在宅療養するがん患者への長期的支援が課題となっている。先行研究において、外来通院するがん患者のニーズ<sup>2)</sup>の検討から、がん患者の主体的療養を支援するための外来看護実践への示唆や、終末期がん患者の在宅療養支援の課題<sup>3)</sup>等が検討されてきた。在宅医療が推進されている中で、在宅療養中のがん患者の語りから思いを明らかにすることは、在宅療養支援を検討する手がかりになると考えた。

研究者らは、文部科学省による平成26年度「課題解決型高度医療人材養成プログラム事業」の「実践力ある在宅療養支援リーダー育成事業」を展開しており、がん患者の在宅療養支援の問題点や課題を検討する基礎資料とするため、本研究に取り組んだ。

#### II. 目的

在宅療養中のがん患者がどのような思いで日々を過ごし、何に困り、何を課題と感じているのか、在宅療養の現状を明らかにし、在宅療養支援の課題への示唆を得る。

#### III. 方法

##### 1. 研究デザイン

質的記述的研究

##### 2. 対象者

40歳以上のがん患者であり、化学療法や胃瘻、経管栄養、留置カテーテル挿入などの医療処置を外来または在宅で行っていること、認知症や精神疾患などがなく、研究の理解や会話が可能であることを対象者の条件とし、A病院より紹介を受け、研究参加の同意を得られた4名を対象とした。

##### 3. データ収集期間

平成29年2月～平成29年3月

##### 4. データ収集方法及び内容

病院から紹介を受け、研究について説明を聞いてもよいという対象候補者に対し、研究者が研究の主旨、方法、倫理的配慮について文書及び口頭による説明を行い、同意書への署名が得られた者を対象とした。

1) 対象者の背景：対象者に許可を得て、診療記録より、年齢、性別、病名と経過、治療状況、在宅療養期間、必要な医療処置の内容、ADLレベル、介護度等の情報を得た。

##### 2) 半構成的面接法によるデータ収集

外来受診日に、病院内の個室で、インタビューガイドを用いて半構成的面接を実施した。主要な面接項目は、①在宅に至る経過、②在宅療養移行に際して受けた病院での準備や支援、③自宅での過ごし方、④在宅療養で受けている支援、⑤在宅療養で日頃感じていること、⑥介護する家族についての思い、⑦在宅療養の支援に関する思いや要望、である。

面接前にバイタルサインズ測定を含めて体調を確認し、面接中にも状態の変化や疲労の様子に注意を払った。不測の事態にも対応できるように、研究者2名で面接を実施し、面接時間はおよそ30分以内とした。面接内容は許可を得て録音し、逐語録を作成した。

##### 5. 分析方法

逐語録から、在宅療養支援の現状や在宅療養に関する患者の思いの文脈を抽出し、意味を損なわないように要約・圧縮するコードをつけた。コードを類似性や関連性に基づいて分類し、テーマをつけてサブカテゴリーとした。さらに、共通性のあるサブカテゴリーをカテゴリーとしてまとめた。分析の妥当性を確保するために、複数の研究者間で説明性の確認や、データからカテゴリーの一貫性を確認し、質的研究の専門家からスーパーバイズを受けた。

#### IV. 倫理的配慮

本研究は、研究者が所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。対象者には以下のような倫理的配慮について文書及び口頭による説明を行い、同意書を得た。研究への参加は自由意思であり、一旦同意をしたあとでも撤回が可能であること、話したくない内容は無理に話す必要はない

## 第39回長野県看護研究学会 論文集

---

2019年3月発行

編集・発行：公益社団法人 長野県看護協会 学会委員会  
〒390-0802 長野県松本市旭2-11-34  
TEL：0263-35-0421  
FAX：0263-34-0311

出 版：株式会社セカンド  
〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F  
TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025  
<https://secand.jp/>



